

意見文作文における文章構成法の習得と生徒間交流

— アクションリサーチ実習における授業の検証 —

田中 宏幸・小笹 由花¹

(2010年10月7日受理)

Paragraph Composition in the Writing of Argumentative Essays:
Acquisition of Skills and Incorporation of a Process of Constructive Criticism between Pupils
— An examination of instructional processes based on practical action research —

Hiroyuki Tanaka and Yuka Kozasa

Abstract: The purpose of this paper is to consider instructional processes relating to a class in which the writing of argumentative essays was taught. The objects of the study were 80 students in the first grade of junior high school. When having students write argumentative essays, it is necessary to consider the setting of the subject, the processes of instruction, the composition of paragraphs, and a process of interactive evaluation. However, in the class in question, emphasis was placed on having the students employ a pattern of composition with assertions in the introductory and concluding paragraphs, and introducing a process of constructive criticism between pupils at the stage of choosing concrete examples to support opinions and the stage of deciding the structure of the essay. This process can be said to be effective for students who are writing argumentative essays for the first time, in that, for example, 100 percent of students used the paragraph composition models presented. On the other hand, insufficient emphasis was placed on ensuring that pupils accurately analyzed and understood the background problems to the subject, leading to a significant number of cases were seen where pupils wrote essays based on an inappropriate choice of examples. In terms of further study, in conjunction with making the intention behind the choice of subject more clear, a wide range of paragraph composition models can be developed.

Key words: argumentative essay, setting of the subject, instructional processes, paragraph composition, interactive evaluation

キーワード：意見文，課題設定，指導過程，文章構成，相互評価

1. はじめに

本学大学院に教職高度化プログラムが開設され、「アクションリサーチ実習」に取り組むこととなった。「アクションリサーチ」とは、「教師が授業を進めながら、生徒や同僚の力も借りて、自分の授業への省察とそれに基づく実践を繰り返すことによって、次第に授業を

改善していく授業研究」(佐野 2000)である。この研究方法においては、①直面している問題の的確な分析、②教育理論や指導事例から得られる知見に基づいた授業改善方法(指導仮説)の設定、③授業実践による検証、④その成果と課題に関する省察、が重要な意味を持つ。教師としての資質向上のために、この新しい研究方法を体験させ、研究力と実践力の両面を身につけさせようというのが、「アクションリサーチ実習」のねらいである。

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

もっともこの研究方法は、持続的・継続的な生徒観察や日常的な指導と密接なつながりを持つが故に、期間の限られた実習では、十分な成果をあげることが困難である。しかし、今回の実習において、実習校の指導教員（メンター）の協力を得、大学院の担当指導教員が支援することによって、ストレートマスターの初年度の取り組みでありながら、意見文指導に関して一定の成果をあげることができた。

本稿は、2009年度後期に実施した「アクションリサーチ実習Ⅱ」における授業研究をもとに、作文指導の在り方について考察しようとするものである。

2. アクションリサーチ実習Ⅱの概要

(1) 実施概要

- ・実習生 小笹由花（教育学研究科博士課程前期）
- ・実施校 広島大学附属東雲中学校
- ・メンター 宇田昭史（東雲中学校教諭）
- ・指導教員 田中宏幸（本学研究科教授）
- ・スーパーバイザー 田中宏幸（同上）
- ・実習期間 2010年1月12日（火）～25日（月）
- ・単元名 「意見文を書くこと」（全5時間）

(2) 予備調査による問題点の発見

①観察による生徒実態の把握

今回、アクションリサーチの対象とした第1学年の生徒は、全体的に学力が高く、学習する姿勢が十分に備わっている。「読むこと」の学習では、授業に積極的に参加することができており、教師の発問に対して個々の生徒が真剣に思考している。また、ワークシート（実習校の国語科ではノートは使用せず、毎時間ワークシートを配布し、保存させている）からは、板書を視写したり授業内容をメモしたりする際に、自分なりに理解し分かりやすくまとめようとしている姿勢を窺うことができた。

しかし、「書くこと」に関しては学習経験が乏しいようである。メンターの話によれば、中学校入学以来、生徒達がまとめた文章として書いたのは、『空中ブランコ乗りのキキ』の続き物語（プロット）や宿泊研修の感想文にとどまっているということであった。また、教室に掲示された生徒作品からは、思い浮かぶままに書き進めていく傾向が強いと判断された。一文が非常に長くなっているもの、主述の照応が乱れているもの、文と文のつながりに問題があるもの、煩雑な文章構造になっているものが散見されたのである。例えば、以下のような文章である。

【作文例1】

成長した所は、一度もみんなに指示などを出す勇氣

がなかったけど文化的学習でソプラノのパートリーダーになっていたけどみんなにちゃんと声をかけてまとめられるかが心配でした。しかし、だいたいの人と仲良くなったため勇氣を出してみんなに声をかけて指示を出すことができました。けど1,2組合同の練習となると声を一度もかけることができなくて結局、最後まできちんと歌うことができませんでした。それは、まだ1組の一部分の人としかおたがいに知りあってないからだと思います。だから1組、2組ともう少し交流をし合うことがまだ必要だと実感しました。

【作文例2】

初日の昼ごはんはグループばらばらで食べてしまった。これは自分が知っていたのにまっいいかと周りに声をかけなかったのがいけなかった。しかし、これで、おおいに反省できて、学習した。3日間の集合全て、5分前を心がけた。これは余分に10分前でこうどうしたから。3日間で聞くしせい、勇氣をもつことを学んで、成長した。先生や職員の人に対してのしせい。みんなの前で発言する勇氣が成長した。

②アンケート調査による文章表現意識の実態把握

とはいえ、生徒たちの「文章表現に対する意識」が低いというわけではない。事前アンケート調査を行ってみると、「意見文を書くポイント」について多くの生徒が日頃から心がけようとしているという結果が出た。（表1）

表1 事前アンケートの結果

	①	②	③	④	⑤	⑥
1	0	0	1	1	0	2
2	9	7	20	27	11	19
3	44	32	32	28	25	34
4	24	36	17	21	41	22
平均	3.19	3.40	3.03	2.90	3.39	2.99
SD	0.63	0.65	0.79	0.82	0.73	0.80

この意識調査は、①「主張（言いたいこと）をはっきりさせてから書くか」、②「主張に合った適切な事例を挙げて書くか」、③「事実と意見を区別して書くか」、④「文章の組み立て（構成）を意識しながら書くか」、⑤「書き上げた文章を見直して、必要なら書き直すか」、⑥「印象的な題名となるようにするか」の6項目について質問したものである。回答は、「1」全く当てはまらない、「2」あまり当てはまらない、「3」やや当てはまる、「4」非常に当てはまる、から選択させた。

この表から明らかのように、全項目において意識できている生徒の割合が高い。特に①、⑤に関しては9割近い生徒が意識できており、その他の項目に関しても6～7割を超える生徒が意識できているのである。

これらの予備調査から推察されるのは、文章を書く際に何が必要かは理解しながらも、その心がけが十分に生かされてはいないということである。

附属東雲中学校の生徒たちは、「書く」という行為自体にはさほど抵抗感を抱いていない。これは、「読むこと」の授業においても「書く活動」が頻繁に取り入れられており、書き慣れているからだと思われる。しかし、考えを論理的整合性のある意見文や説明文にまとめあげる力はまだ身につけていない。この力の育成は、中学校学習指導要領（平成20年改訂）に照らし合わせると、第2学年の指導事項に相当する内容となるが、生徒実態に即して判断すれば、当面の課題として取り組むことができると考えた。

(3) リサーチ・クエスチョンの設定と指導仮説

以上の予備調査から明らかになった問題点と担当時間・配当教材との関係から、リサーチ・クエスチョンを以下の2点に絞ることとした。

- (1) 表現過程において取材と構想に重点を置いた指導は、どのように行えばよいか。
- (2) 論理的な文章を書くのに必要となる視点を得られる相互評価は、どのように行えばよいか。

さらに、このリサーチ・クエスチョンをもとに3つの指導仮説を立てた。

- 〈仮説1〉主張と具体例、書き出し（主張）と結びが対応している意見文とそうでない意見文とを比較することで、「意見文を書くときのポイント」①主張と理由が明確であること、②具体例が主張を支えるものであること、③論旨に首尾一貫性があることを生徒自身に気づかせることができるのではないかと。
- 〈仮説2〉具体例を想起・選択する際、グループで話し合うことで、観点が明確になり、より適切な具体例を挙げることができるようになるのではないかと。
- 〈仮説3〉評価シートを用い、相互に評価し合うことで、学習意欲を高めるとともに、読み手意識を高めることができるのではないかと。

(4) 単元計画

これらの仮説を検証するために全5時間の意見文作成の授業を計画した。

○単元名 「意見文を書こう」

○対象 附属東雲中学校1年1組、2組（各40人）

○単元目標

- ・双括式の文章を理解し、書くことができる。
- ・具体例が主張を支える文章を書くことができる。

○指導計画

時	過程	学習内容
1	型の理解	・論理的整合性のある文章とない文章を比較することによって、双括式の文章形式を理解するとともに、具体例と主張とのつながりを意識する。
2	取材	・新聞記事を読み、自分の意見をもつ。 ・主張と理由を1~2文で書き表し、主張を支える具体例を想起する。
3	選材構想	・同じ主張の者でグループを編成し、前時に挙げた具体例のうち、どの例が適切かアドバイスし合う。 ・仮タイトルを決め、構想を完成させる。
4	記述	・構想をもとに意見文を書く。 ・仮タイトルを印象的なものに修正する。
5	交流	・評価シートをもとに相互評価を行う。 ・本単元の学習をふりかえる。

(5) 教材

上記の指導を行うにあたり材料として用いたのは、次の三種のプリント教材である。

○第1時用

A 「意見文の一つの型を知ろうーコンビニの深夜営業」(呉市立中学校国語科教諭作成のモデル作文)

○第2時以降用

B-1 「中学生のオシャレ」(朝日新聞2009年7月26日及び8月3日の投書)

B-2 「18歳は「大人」か？」(朝日新聞2009年8月29日「be-between」)

①Aの教材について

Aは、同じ主張を述べるための2つの意見文をとりあげたものである。

(ア) 私は、コンビニの深夜営業は必要だと思う。なぜなら、今、コンビニは夜もいろいろな役割を果たしているからだ。

先日、私は夜、包丁で指を切ってしまったということがあった。たまたま殺菌消毒薬がなくなっていて、どうしようかと焦った。しかし、母が「コンビニに置いてあるわよ。」と言って、買ってきてくれた。もし、コンビニで薬を売っていなかつ

たら、化膿して、大変だったかもしれない。コンビニが救急箱のような役割を果たしてくれるのだ。

また、夜のコンビニは、子どもや女性にとって逃げ込む場所にもなっている。平成19年3月から平成20年2月に、午後11時台から午前5時台の女性の駆け込みは、全国で約5000件あったそうだ。深夜営業がなくなると困る人がいるのだ。

このようなことから、夜も多くの役割を果たしているコンビニの深夜営業は、必要であると思う。

(イ) 私は、コンビニの深夜営業は必要だと思う。なぜなら、今、コンビニは夜もいろいろな物を売っているからだ。

先日、夜遅くなって宿題をしようとしたら、ノートの残りがわずかになっていた。近くのコンビニにノートを買っていたのを思い出し、すぐ買いに行き、なんとか宿題ができた。もし夜開いている店がなければ、宿題忘れをするところだった。宿題を忘れると、学校の授業が全くわからなくなることさえある。絶対に忘れてはいけない。

また、あるコンビニには、とても明るく笑顔で挨拶してくれる店員さんがいる。明るい挨拶に、私も、挨拶を交わし、元気をもらうので、いつもそのコンビニに寄りたくなる。おそらく、コンビニのお蔭で街全体が元気をもらっていると思う。

このようなことから、コンビニは、便利で楽しく元気がもらえ、明るい街づくりに貢献していると思う。

(ア) と (イ) は、いずれも「結論先行型」の構成を用いており、文章の「はじめ」に主張が明確に書かれている。しかし、「書き出しと結びの照応」および「具体例と主張の内容的対応」という点においては、その差が歴然としている。使用語彙や文章の長さにおいても、無理のないレベルであり、文章構成の型を具体的に理解させるのにふさわしい教材であるといえよう。

②Bの教材について

Bでは、中学生が興味を持ちやすく、意見を支える具体例が比較的思い浮かべ易いテーマを2種類取り上げ、教材化することとした。2009年7月～10月の間に朝日新聞に掲載されたものである。

B-1は、「中学生のオシャレの是非」に関するものである。中学生の投稿「オシャレいけないんですか？」(7月26日)と、その投稿への反論として掲載された「いつか働いて自由に楽しむ」(中学生)及び「周りが見える目も意識しよう」(大学生)の2編とを組み合わせることとした。生徒にとっては、同年代の投稿でもあ

り、身近な題材として考えやすいと判断した。

B-2は、法制審議会部会が「成年は18歳引き下げが適当」との報告をまとめたことを受けて、朝日新聞社がbe モニター(朝日新聞読者)に対してアンケート調査した結果をまとめたものである。約8000人から回答が寄せられており、円グラフや棒グラフも用いられ、視覚的にも分かりやすい解説記事となっている。成人年齢引き下げの問題は、中学生にとってはまだ身近な話題とはなりえないであろうが、賛否相半ばする問題であり、データを活用して意見を形成するのにふさわしいものと判断した。

3. 授業の実際

研究授業全5時間は、1組、2組とも同日に授業を行った。以下、各授業の目標と内容を略述する。

〔第1時〕2010年1月14日(木)「型の理解」

目標：①双括弧の文章形式を理解することができる。

②具体例が主張を支えていることを理解する。

第1時では、教材Aの二つの意見文を比較させ、良いと思う方を選択させた。さらに、選択理由を個人で考えさせた上で、周囲の生徒と相談させ、数人に指名し発表させた。生徒の気づきをもとに共通理解を促すため、板書において生徒の発言を整理し、「意見文を書くポイント」を図示した。

第1時の授業の最後に、「意見文を書くポイント」を自分の言葉で箇条書き風に整理させた。

〔第2時〕2010年1月15日(金)「取材」

目標：①新聞記事から自分の意見を持つ。

②主張を支える具体例を考える。

第2時では、まず新聞記事(B-1及びB-2)を読ませ、二つの記事のどちらについて意見文を書くか選択させた。さらに、ワークシートに1～2文で「主張と理由」を書かせた。

その後、「主張」の根拠となる「具体例」をできる限り挙げるように指示した。(以上、個人作業)

ワークシートから見る限り、この時点では、「主張と理由」を支えるものにはなりそうもない「具体例」を挙げている生徒が多かった。

〔第3時〕2010年1月18日(月)「選材・構想」

目標：①主張を支える具体例を選択する。

②仮のタイトルをつける。

第3時では、前時に挙げさせた具体例についてグループで話し合わせた。グループ構成は同じ主張の者同士となるよう、授業者が4～5人のグループを指定した。

話し合いでは、個々に挙げた具体例が主張を支える

ものとして適切であるか、より納得できる具体例はどれか、他に考えられる具体例はないかなどの意見を出し合わせた。

生徒達は日ごろ、一つの結論を出すための話し合いには慣れていないが、それぞれの考えに対し指摘し合うことに慣れていない。そのため、話し合い活動時には、授業者（小笹）に加えて、教科担任（メンター）や授業記録補助者（博士課程後期の院生）も適宜アドバイスをを行った。話し合い後、各自に、意見文に書く具体例を2つ選択させ、ワークシートに意見文の構想を立てさせた。なお、仮タイトルをつけさせることで、意見の方向性を一層明確にさせるとともに、読み手を意識させるようにした。

第2時のワークシートと第3時のワークシートとを比較すると、主張と対応していない具体例を挙げてしまう生徒は大幅に減少した。

第3時のワークシート

〔第4時〕2010年1月21日(木)「記述」

目標：①双括弧の意見文を書く。

②具体例が主張を支えている文章を書く。

第4時では、前時に書いた構想をもとに意見文を書かせた。授業開始時に簡単に原稿用紙の使い方を確認した後、400～600字で書くように指定し、記述時間とした。（名前はペンネームを使用させた。）

いずれの組も30名ほどは、30分程度で書き上げることができた。書けた生徒達には仮タイトルの修正と本文の推敲を促した。

〔第5時〕2010年1月25日(月)「交流」

目標：①他の人が書いた意見文を適切に評価する。

②他者からの評価をもとに自分の書いた意見文を見直す。

第5時は、評価シートを用いて相互評価を行わせた。事前に記入例を示し、コメント欄の記入の方法と意義を理解させた。評価の観点は、以下の5項目とした。

1) “はじめ”に主張を明確に書いている。

2) 主張と結びの内容が対応している。

3) “なか”に主張に合った具体例を挙げている。

4) 具体例を生き生きと表現できている。

5) タイトルが魅力的である。

意見文1枚と評価シート6枚を1セットとしてクリアファイルに入れ、全員が順に回していくこととした。（6名からコメントをもらうのである。）評価時間は意見文1枚につき4分間とし、緊張感を持続させた。

評価シートもペンネームで書かせ、日頃の人間関係が影響しないようにした。その結果、評価シートには率直なコメントが書かれることとなった。

相互評価の時間、生徒達は最も集中していた。また、返却された評価シートに批判的な評価がされていても、好意的な受けとめ方ができており、次の改善につなげようとする姿勢が窺えた。

4. 生徒作文の実際

(1) 課題選択の傾向

B-1「中学生のオシャレ」を選択した生徒が23名（約3割）、B-2「18歳は「大人」か？」を選択した生徒が55名（約7割）であった。B-2は、社会的な問題であり、事例を挙げるのが困難だから、多くの生徒が回避するかと予想していたが、全く逆の結果となった。B-1では自分の価値観が直接問われるのに対し、B-2ならば客観的に論じやすいと直感したのかもしれない。あるいは、今回の生徒たちの学習意欲の高さの表れであると解釈することもできる。いずれにしても、中学1年生の問題意識の実態が窺えて興味深い。

(2) 「中学生のオシャレ」の作文例

【作文例3】オシャレしたいけど……

私は、中学生のオシャレは時と場合を考えて区別する必要があると思う。なぜなら、オシャレをする事によって自分が損をする事があるからだ。

休みの日、友達と遊びに行く時には自分のしたいオシャレをして遊びに行けば良い。中学生はオシャレに興味をもつ年頃だし、遊びに行くというのに、オシャレをするなどというのは納得ができない気もする。オシャレをする事で、自分が損をすることも無いし、思う存分オシャレを楽しめば良いと思う。

しかし、だからといって、いつでもどこでもオシャレをして良いという訳ではない。学校へ行く時に、ネイルアートをしたり、スカートの丈を極端に短くして行ったとする。それを見て、良い行いだと思う人はまず居ないだろう。むしろ、先生達に目をつけられたり内申が下がったり、クラスメイトに嫌われたりすることも無いとは言えない。オシャレをする事で、自分が

損をする事もあるという事だ。

以上のような事から、中学生はオシャレをしても良いが、オシャレをする事で自分が損をするような時は、オシャレをしてはいけない。オシャレをしても良い時、悪い時の区別をする必要があると思う。

《考察》

賛成か反対かという二項対立的な単純な思考ではなく、時と場合を考えて区別するべきだという主張に、この生徒の思考の深まりを見ることができる。

文章構成においても、双括式の構成法を見事に使いこなしている。接続語句の使い方も適切である。とりわけ、第三段落の「しかし、だからといって」が効果的である。この接続語句によって、物事を両面から見ることが可能になっている。

(3) 「18歳は「大人」か」の作文例

【作文例4】18歳は大人として扱うべきだ

僕は18歳は大人にしてもいいと思う。なぜなら、精神的にも肉体的にも二十歳と違いはないから成人年齢を十八歳にするのが適当だと思ったからだ。

例えば、18歳でもアルバイトや就職活動をしている人もたくさんいる。このような人達は二十歳と何の変わりもないし、場合によっては大学に通っている二十歳の人より社会活動を経験していることもある。また、就職していない十八歳の人もたくさんいるけれど、その人達と二十歳に特に違いはない。

他にも、18歳は車の免許をとるということができる。18歳で免許を取ることができれば、それだけで、いろんな場所に行くのに便利だ。いろんな所に行くことは社会のルールやマナーなどが分かるようになるのでいいと思う。

このようなことから、二十歳と十八歳に特に違いはないことが分かる。二十歳も実際は大学生で社会活動の知識は十八歳とほぼ同等だろう。大学に一、二年いった程度で十八歳と本当に変わりがあるのだろうか。そういう面でいえば、就職活動している十八歳もいるし、二十歳と十八歳の決定的な違いがないのなら、十八歳を成年という扱いをしてもいいと思う。

《考察》

B-2の課題選択者の内、「18歳は大人だ」と主張した生徒は11名しかいなかったが、その中の1編である。

教材A（ア）で用いられた文章構成法を利用して、主張の一貫した文章に仕上げている。第二段落と第三段落では、根拠となる事例を具体的に挙げてきている。さらに、結びの段落でこれまでの事例を総括するような形で、「二十歳と十八歳に決定的な違いがあるのか」と問いかけることによって、力強さを備えた文章となっている。

この文章を書いたのは、実は【作文例2】の生徒である。2編を比較すると、文と文とのつながりに対する意識が高まっていることが明らかである。今回の指導の成果の一つである。

【作文例5】自立と自律

私は、十八才はまだ大人ではないと思います。なぜなら、大人になったという事は、親の手を借りず自分で身の周りの事をなんでもできて、「自立」しているという事だから、今時の十八才は自立しているといえないからです。

自分の兄が現在十八才なのだが、今の時期だと多くある願書を親が全部書いているし、家事も一人暮らしもやっているわけではないので、自立できているとはいえません。

また、成人式で暴れる人もいて、判断力があるとはいえません。暴れる事が悪いと分かっている、「それがカッコいい」と思ってやっているのだから、「自律」も、できている人が少ないのです。

このように、親がいなくて生活できない人もいるし、自分だけで考えて行動できる人も少ないということで、今時の十八才は、まだ大人になりきれていないと、わたしは思います。

《考察》

今回の学習で生まれた作文の中で、最も優れた文章の一つとして評価できるものである。

「18歳はまだ大人ではない」と主張した作文は44編あったが、その理由の大半は、「現在の法律では20歳を大人として定めているから」という趣旨のものであった。それに対し、この生徒は、第二段落で身近な兄の事例を挙げた上で、第三段落では成人式で暴れる若者という社会的事象に広げることによって、自分の理由に普遍性を持たせることに成功している。

文章構成も、双括式を見事に使いこなし、安定感のあるものとなっている。

5. 成果と課題—仮説の検証

(1) 事後アンケート調査の結果より

第5時の授業終了時に事後アンケートを行った。(質問項目、回答指標は事前アンケートと同じである。)

表2 事後アンケートの結果

	①	②	③	④	⑤	⑥
1	0	0	1	1	0	2
2	9	7	20	27	11	19
3	44	32	32	26	25	34
4	24	38	24	21	41	22
平均	3.19	3.40	3.03	2.90	3.39	2.99
SD	0.63	0.65	0.79	0.82	0.73	0.80

事前アンケートと事後アンケートの比較から以下のことが明らかになった。

「①主張(言いたいこと)をはっきりさせてから書く」ことへの意識は、事前アンケートでは半数以上が「3 やや当てはまる」と回答したが、事後アンケートでは6割以上が「4 非常に当てはまる」と回答している。もともと意識は高かったが、いっそう高まったものと判断できる。

「②主張に合った適切な事例をあげる」に関しては、事前、事後アンケートの数量的な比較からは意識が高まったかどうかはわからない。しかし、アンケートの自由記述欄に②に関する記述が多かったことから、意識の質的な変化があったことが窺える。

「③事実と意見を区別して書く」、「④文章の組み立て(構成)を意識しながら書く」に関しては、ともに事前アンケートでは「2 あまり当てはまらない」と答えた生徒が1/4程度いたが、事後アンケートでは、ほぼ全員が「3 やや当てはまる」と「4 非常に当てはまる」と回答している。事実と意見を区別する意識と構成に対する意識が高まったことがわかる。

「⑤書き上げた文章を見直して、必要なら書き直す」、「⑥印象的な題名となるように工夫する」に関して大きな変化が見られないのは、今回行った授業においてあまり重点を置かなかつたためであると考えられる。また、推敲の時間を十分に取れなかったことも影響していると考えられる。

(2) 作文例の比較検討より

本単元では、漢字や文法、文の長さ、段落の量的バランス等、細部への指導に重点を置かず、記述前の取材、構想段階に焦点を当てた。それにより、①主張を明確にする、②主張に合った事例をあげる、③事実と意見を区別する、④構成を意識する、という意見文作成に関する4観点の意識を高めることができた。

【作文例4】のように、予備調査と比較すると顕著な伸びを示す生徒も現れた。もちろん、まだ不完全なものであり、修正すべき点も散見されるが、これからの学習の場でも活用することのできる文章構成の一つの型を身につけたことは間違いないであろう。

本実践終了後、クラス担任が「学校の憲章」に関する理解を確かめるための文章を書かせたところ、ほとんどの生徒が以前に比べはるかに論理的な文章を書くことができたという報告をもらった。

授業開始時には「作文」に対して苦手意識を抱く生徒が多かったが、記述前指導を重視したことにより「自分にも書ける」という達成感を与えることができたと言える。

また観点が明確に示された評価シートを用いた相互

評価により、問題点を自覚でき、「もっと書きたい、もっと知りたい」という学習意欲が高まり、「作文」を敬遠する意識を減らすことができたと言える。事後アンケートの自由記述欄に、「書くことが楽しかった」と数多くの生徒が書いたのである。

(3) 仮説の検証

以上のデータを基に整理すれば、仮説の適否については、次のように結論づけることができる。

〈仮説1〉「論理的整合性の差の明確なモデル意見文を比較させる」という指導法は、生徒に関心を持たせ、「意見文を書くときのポイント」を自覚させることに有効に作用したと言える。提出された79編の作文のうち、全編が双括弧の文章構成法を活用していたことがその一つの証拠であると言えよう。

また、〈仮説2〉「取材段階にグループ学習を取り入れる」という指導法も、適切な具体例をあげることに有効であったと言える。第2時において個々に考えさせた具体例には、主張を支えることができていないものや、根拠ではなく新たな主張になっているものが多くみられたが、第3時のグループ学習によって、それらの不適切な具体例に対して指摘を受け、より適切な具体例を選択できるようになった。

さらに、〈仮説3〉「相互評価」という指導法が「学習意欲を高めるとともに読み手意識を強める」ことに有効であった。前述したように、事後アンケートにおいて「書くことが楽しかった」と記述した生徒が数多く現れた。また、タイトルについても、第3時の段階では、テーマをそのまま記入するか、もしくは無記入であった生徒が、【作文例5】の「自立と自律」のように工夫したものをつけるようになった。

(4) 今後の課題

以上のように、今回の研究授業「意見文作文の指導」において、文章構成法を習得させることと生徒間交流を用いることの有効性を実感することができた。だが、生徒作文を再精査してみると、いくつかの課題を見出すことができる。

①課題設定の意図の明確化

一つは、課題設定の意図をもっと明確にしておくべきであったということである。とりわけ、「18歳は「大人」か?」がそれに当たる。というのは、「18歳成人」に賛成するにしろ反対するにしろ、【作文例4】第3段落のように、現行の法律における規定を根拠例として挙げる生徒が少なくなかったからである。

この課題にあっては、制度のあり方が問われているのだから、現行の制度を根拠とするのではなく、18歳の精神的成長度や社会的責任遂行力などを中心に、制度の妥当性そのものを論じなければならない。もちろ

ん、それを中学1年生に求めるのは酷なことである。だからこそ、授業者が課題内容をよく分析しておき、新聞記事を読解する段階で、問いの意味を明確にすべきであった。

ただし、このことは、「18歳は「大人」か?」というテーマが不適切だったということの意味しない。【作文例5】のように書ける生徒も少なくなかったし、授業中や休み時間に、「18歳を大人と見なせるかどうか」と話し合っている姿も散見された。

しかし、理解することと表現することの間には大きな隔りがある。個人差も非常に大きい。今回の実践では授業者がその点に十分な配慮を行えなかったのである。どの程度まで生徒に要求しても良いのかを計りかねる場面も多々あった。今後多くの実践を重ね、中学生の発達段階を十分に考慮し、生徒実態に合った課題設定の方法を探究していきたい。

②文章構成モデルの開発

本実践では、文章構成法を一つの型に絞り、推敲の観点も限定的なものにした。このように単純化することによって活用しやすくなったという利点も大きいですが、課題も残る。便利さは、いつでもどこでもこの型で通そうとする単純な発想を招きやすいからである。

生徒たちの表現力を豊かなものにしていくには、さらに多彩な文章構成の型を体験させ、時と場と意図に応じた表現スタイルを選べるようにしなければならないであろう。どのような型を学習させればよいか。学習内容を系統的に整理し、継続して行っていくことが必要となる。今後の課題としたい。

6. おわりに

以上の「アクションリサーチ実習Ⅱ」の成果を、作文教育研究の立場からまとめておこう。

そもそも、中・高等学校の生徒たちに意見文を書かせるには、「意見を形成させること」と「論じ方を習得させること」の両面から授業計画を立てていかなければならない。今回の意見文作文の授業では、その二つの実践課題を視野に入れながら、①課題の設定、②主

張の明確化、③根拠事例の収集と選択、④文章構成上の型の習得、⑤相互交流による表現意欲の喚起、において様々な工夫を凝らして進めていった。その結果、中学1年生にとってはやや難しい課題であったが、生徒たちの向上心と実習生の熱意にも支えられ、目まじしい伸びを引き出すことができたと言える。

ただし、指導しやすい「型の習得」が優先されたために、「想（意見）の拡充や深化」という点において改善点が残ることとなった。意見文の指導にあたっては、課題の背景にある問題状況を的確に把握することや、手持ちの情報で満足せずに根拠となる事例を調査する活動などが、重要なファクターとなることを再認識させられたのである。「想の形成・拡充・深化」と「型の習得・活用」とをいかに融合させていくか。今後も実践を通じて解明していく必要がある。

【謝 辞】

アクションリサーチの実施において、宇田昭史先生にはメンターとして様々なご配慮と貴重なご意見をいただきました。深く感謝しております。また、課題に懸命に取り組んでくれた生徒の皆さんに心より感謝申し上げます。

【参考文献】

- 井上尚美『言語論理教育入門』明治図書、1989年
 内田伸子『子どもの文章』東京大学出版、1990年
 大西道雄『意見文指導の研究』溪水社、1990年
 大西道雄『作文教育における文章化過程指導の研究』溪水社、2004年
 大村はま『大村はま国語教室6』筑摩書房、1983年
 佐野正之『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店、2000年
 三宮真智『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』北大路書房、2008年
 田中宏幸『発見を導く表現指導』右文書院、1998年
 野矢茂樹『入門！論理学』中公新書、2006年